

在宅介護における多職種連携の方法 「チーム」が効果的に働いた事例から考える

医療的ケアを必要とする要介護者が増えていく一方で、多職種での連携、とくに医療専門職との連携方法に苦手意識をもつケアマネジャーは少なくないようです。そこで長年にわたり医療・介護連携を行ってこられた水下文美さんに、コミュニケーションのコツを解説していただきます。



執筆 ▶ 水下文美

医療法人社団健身会 居宅介護支援センターさくら 管理責任者
主任介護支援専門員、認定ケアマネジャー、認定社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士等。障害福祉の現場を経て高齢者福祉に携わる。ケアマネジャーのほかに、成年後見人も行っている。ケアマネジメント学会での研究発表や、介護保険などをテーマに地域での講師、原稿も執筆。著書：『介護認定』（岩波書店：共著）『医療と介護の融合』（日本医療企画：共著）など。

1. はじめに

要介護認定を受けている在宅高齢者は、何らかの病気を抱え、その病気と付き合いながら生活を送っています。本人や家族のみで病状のコントロールを行っていくことは、難しいことも多々あります。また、ケアマネジャーが、適切なケアプランを作成したとしても、それぞれの専門職がチームとして機能していかないと、効果的な相互作用が期待できません。体調の管理、食事、運動、睡眠、健康状態の確認など、主治医やサービス事業所は勿論のこと、本人家族を含めたチームで、同じ方向を向いて、在宅生活を継続していくために、何が必要なのか？

自らが、専門職とのやり取りを実際に行った連絡・調整の視点から、「多職種連携」が効果的に働いた事例を取り上げながら、考えていきたいと思えます。特に今回は、多職種連携のなかで

も悩みを抱えているケアマネジャーが多い「医療連携」について述べていきます。

「連携が大切です」ということは、ケアマネジメントを行ううえで、皆さんが分かっていることだと思います。「当たり前に行っています」と言う方は、ぜひ続けて下さい。本稿では私が実際に行ってきたこと、自分の頭の中のイメージなどを示してお伝えしていきたいと思えますので、「こういう方法・考え方もあるのだ」と思った方は、参考にしてみてください。皆様のこれからの業務に少しでもお役に立てれば嬉しいです。

2. 連携のイメージ

私が、新人ケアマネジャーのときに、先輩や研修などで教わった「連携のイメージ図です」(図1)。

利用者を囲むように、各関係者が丸くなり、ケアマネジャーを中心に、連絡を取り合い、さらに関係機関と利用者・



さくら中央クリニック主治医と看護師と著者



LE在宅・施設 訪問看護ステーション 自由が丘 (看護師、PT)



ふすま調剤薬局 (薬剤師)



さくら中央クリニック (訪問管理栄養士)